様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３９４

研究課題名（和文）I.F.アルノルト作品のゴシック小説的特徴とドイツ・ロマン主義への影響

研究課題名（英文）Ignaz Ferdinand Arnold's works as german gothic novels

研究代表者
亀井　伸治（KAMEI, NOBUHARU）

中央大学・経済学部・准教授

研究者番号：１０３２９０３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　十八世紀末にエアフルトのオルガニストで著述家としても活躍したイグナーツ・フェルディナント・アルノルト（1774-1812）は、音楽的著作の他に夥しい数の〈恐怖小説〉を書いた。〈恐怖小説〉とは、ドイツにおけるゴシック小説と言うべき当時の流行ジャンルであり、アルノルトはその人気作家のひとりとなっていた。そこには、合理と非合理がせめぎ合う十八世紀の特質が端的に表出している。本研究では、彼の小説の中から超自然や盗賊などを題材にした幾つかの代表的作品を採り上げ、ロマン主義への影響も含めて考察した。その成果は、英米のゴシック小説に比べて研究が遅れているドイツのゴシック小説の解明に寄与するものと信じる。

研究成果の概要（英文）：　Ignaz Ferdinand Arnold (1774-1812: also named as Theodor Ferdinand Kajetan Arnold) was in his time a well known writer and organist. Besides several critical biographies of his contemporary composers, he wrote a great number of popular novels on ghosts, conjures, crimes, robbers, secret societies, conspiracies and other sensational subjects.
  This study mainly dealt with his two types of novels: novels that take up the central theme of supernatural phenomena such as necromancy, curses and bilocation, and novels that depict the activities of bandits. In the former type of novels uncanny supernatural mysteries are indeed described, but eventually they are rationally explained. And in the latter hostile feelings toward secular and religious order and power are stirred up in an unreserved manner. Here we can clearly recognize one of the characters of the eighteenth century that rational and irrational each other conflicts.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ゴシック小説　恐怖小説　啓蒙主義　十八世紀末　盗賊小説　通俗文学　ドイツ・ロマン主義　E.T.A.ホフマン

１．研究開始当初の背景

(1) 十八世紀後半、活版印刷技術の改良により大量印刷が可能になる一方、義務教育制度の導入とそれに伴う広い国民階層にわたる読書能力の向上、貸本図書館や書籍行商人など配付手段の展開によって、ドイツの読者層は急速に拡大した。1780 年代後半から 1790 年代に入ると、通俗小説の出版も、それに応えて爆発的に増加し、その氾濫は 1830 年代までドイツ語圏全土を覆い尽くすことになる。高度な文学的言辞を用いた作品が少ししか流布し得なかった反面で、通俗小説が、ドイツ文学史上、空前の規模で流通していたのである。そして、その主要ジャンルのひとつが、ホレス・ウォルポールの『オトラントの城』(1764) を嚆矢とする英国の〈ゴシック小説〉と同種の文学ジャンルたる〈恐怖小説〉Schauerroman だった。

ドイツでの〈恐怖小説〉という呼称は、それに属するすべてのテクストに、戦慄の感覚を伝達しようとする物語効果が共通して認められることに由来する。〈恐怖小説〉は、英国のゴシック小説に比べても質・量共に決して遜色のないものであり、また、両者の間には多岐にわたる相互影響関係が存在していたことも、イーディス・バークヘッドやカール・グートケら英独双方の研究者によって早くから指摘されていた。ところが、英国のゴシック小説に関しては、ドロシー・スカーバラの『現代英国小説における超自然』(1917) に始まり、里程標的著作たるモンタギュー・サマーズの『ゴシック探究』(1938)) を経て現在の研究に至るまで、さまざまな視点からの新しい考察がなされているのに対して〈恐怖小説〉は、残念ながらドイツ本国でもほとんど顧みられることなく、従って、きちんとした研究と言えるものはほんの僅かしかなかった。この状況に変化が生じ始めたのは、1960 年代の半ば以降、ドイツの通俗小説全般を対象にした諸研究が現れるようになってからのことである。そして、さらなる大きな展開は、カナダの研究者マイケル・ハドリーによってもたらされた。その『知られざるジャンル』(1978) において彼は、このジャンルを包括的に論じ、そうして〈恐怖小説〉をより国際的な研究の俎上に上せるべく、〈ドイツのゴシック小説〉German Gothic Novel という英語による統括的名称を提案したのである。

多彩なサブジャンルを包含するドイツのゴシック小説とドイツ・ロマン主義の小説の関係、そして、ゴシック小説とロマン主義小説を巡る英独両国間の関係は、これまでの文学史が教えるより遥かに広範で複雑である。それらの関係は、ハドリー以降、主に英米のドイツ文学者やゴシック小説研究者によって徐々に解き明かされてきている。またドイツでも、ようやく今世紀に入って、遅ればせながら、このジャンルに対する再評価と学術的な研究が急速に本格化し始めた。

(2) 石川 實・大阪大学名誉教授の著書『シラーの幽霊劇』(1981)により〈恐怖小説〉の存在を知って興味を抱いた本研究の報告者は、その後、上記の国際的動向を踏まえて、ハドリーのいう〈ドイツのゴシック小説〉に該当する作品を調査し、ジャンル全体を通観する研究を提示しようと努めてきた。その中では、各先行研究で曖昧だったジャンル概念を整理し再定義した上で、諸作品を分類し直した。そして、研究のひとつの区切りとして、その成果を博士論文「ドイツのゴシック小説の諸相」としてまとめ、2007 年に早稲田大学に提出した（学位授与は、2008 年 2 月）。これには、ロマン主義作家Ｅ.Ｔ.Ａ.ホフマン作品へのゴシック小説の影響を考察した附論も加えた。

さらに 2009 年 11 月には、上記学位論文に加筆・修正したものを『ドイツのゴシック小説』として彩流社から上梓したが、これは「総論」というべきものであった。そこで今回の研究では、「各論」へと進むべく、個別研究として、多くの作家の中から、まず最初にイグナーツ・フェルディナント・アルノルトをその対象として選ぶことにした。なぜアルノルトの作品を選択したのかという理由、並びに、その研究の目的と期間内での達成目標は以下の通りである。

２．研究の目的

(1) ドイツ中部の都市エアフルトの教会オルガニストにして著述家だったイグナーツ・フェルディナント・アルノルト Ignaz Ferdinand Arnold（テーオドーア・フェルディナント・カイェタン・アルノルト Theodor Ferdinand Kajetan Arnold と表記されることもある） (1774-1812) は、モーツァルトやハイドンなど、有名音楽家の最初期のモノグラフィの著者として僅かにその名を今日に留めている。だが、同時に彼は、十八世紀末当時の通俗小説の代表的なジャンルであり〈ドイツのゴシック小説〉というべき〈恐怖小説〉の人気作家でもあった。今回の研究は、アルノルトの作品におけるゴシック小説的特徴を精査すると共に、それらの特徴がドイツ・ロマン主義の形成に少なからぬ影響を与えた点にも注目して、ドイツ文学研究ではこれまでほとんど等閑視されてきた彼の作品の文学史的価値をあらためて問い直そうとするものである。

ドイツのゴシック小説たる〈恐怖小説〉は、大別して三つの主要なサブジャンル、〈騎士小説〉Ritterroman、〈盗賊小説〉Räuberroman、〈幽霊小説〉Geisterroman から構成される。これは、英国のゴシック小説以上に多彩なモティーフを含んでいることを意味する。多作だったアルノルトの諸作品は、これらサブジャンルの持つほとんどのモティーフを網羅している。すなわち、幽霊や降霊術（『血の染みのある肖像画』1800）、秘

密結社（『ミラクローゾあるいは恐るべき結社イルミナーティ』1802)、ドッペルゲンガー（『分身のいるウルスラ会修道女』1800）吸血鬼（『吸血鬼』1801)、反教権主義（『墓の上での婚礼の接吻、あるいはマリーエンガルテン教会での真夜中の結婚』1801)、反社会的な犯罪行為（『黒いヨーナス、盗賊にして放火殺人犯』1805）などである。ジャンル小説は同趣向の作品や類似作が多いので、同じモティーフやテーマをどう捌いているかでその作者の技量を測り易い。上述のハドリーの論考など、ドイツのゴシック小説に関する英米の先行研究では、アルノルトの小説の幾つもの題名がジャンルを代表する重要作として挙げられている。本研究では、ゴシック小説領域の大半をカヴァーするアルノルト作品を詳しく分析することにより、彼がジャンル小説の作家としてどのような個性を発揮しているのか、そして、如何なる点において卓越しているのかを確認しようとした。

ところで、文学（それも恐怖の要素を多分に含んだ物語創作）と音楽という二つの領域で活動した点において、アルノルトは、E.T.A.ホフマンと比較される。ドイツ・ロマン主義の作家の中でホフマンは、ルートヴィヒ・ティークと同様、日記や手紙の中でたびたび〈恐怖小説〉に属する作品への熱狂を語っている作家である。だが、アルノルトとホフマンについての具体的な比較研究はいまだ為されていない。ゴシック小説をロマン主義の前段階と捉える最近の研究の傾向からも、これら二人の作家の対比を掘り下げる意味は大いにあろう。そこで、今回の研究では、両者の比較によって、同一あるいは類似の題材を扱っていても、通俗小説とロマン主義小説ではその内容や表現においてどのように異なっているのか、その変化も含めて考察せんとした。

⑵ 上に述べたように、アルノルトの作品は、活字メディアにおける大量生産・大量消費時代の幕開けの時代に流行した通俗小説であるが、文学史的・文化史的に見て多面的な研究価値を有している。本研究は、この忘れられた作家アルノルトの総体的な再評価を企図していた。それはまた、英米でのゴシック小説に比べて著しく遅れているドイツの〈恐怖小説〉の研究において、このジャンルのより詳細な解明に寄与するものであり、また同時に、日本における十八世紀末ドイツ文学史研究の空隙を埋めんとするものでもある。さらに、社会一般に対しては、ゲーテやシラーのような大作家ばかりに目が向きがちな十八世紀末のドイツの文学シーンの意外な側面を知らせることになろうし、他国に比べその水準がもうひとつだと思われているドイツの娯楽小説に対するイメージを少しでも塗り替えるに役立つものともなるはずである。

３．研究の方法

(1) 研究遂行のためには、まずテクストとなるアルノルトの作品を入手する必要があるのは言うまでもない。ところが、十八世紀末に大量出版され流通していたドイツの通俗小説は、そもそもが読み捨て本であった為、どの作品も残存している部数は非常に僅かであり、また、従来の文学研究的観点からは無視されてきたが故に、覆刻のある作品は、ほんの一部である。勿論、アルノルト作品もその例外ではない。そもそも、アルノルトの著作は、カール・ゲーデケなどの書誌に従えば、約 80 あり、その内のほとんどが〈恐怖小説〉などの通俗文学だったはずだが、現在ドイツ語圏の図書館に収蔵されているものは、そう多くない。従って、このような物理的制約と、加えて、研究期間内にどれだけの作品を読了し得るかという時間的限界も考え、今回の研究では、入手が比較的容易な著作に対象を絞ることにした。ジャンル小説は大抵の場合、クリシェをもって書かれているので、残存する代表作からだけでもその諸特徴を抽出し、アルノルト作品全体の像を掴むことができると判断したからである。さらに、アルノルトの作品分析において比較すべき他の〈恐怖小説〉および英国のゴシック小説のテクストも参照すべく入手した。

(2) テクストを入手した方法であるが、近年、欧米の各図書館が蔵書のデジタルデータ化を開始し、テクストへのアプローチが簡便になってきた。また、それらのデータを用いた、オンデマンド印刷によるペーパーバックも購入可能になっている。そこで、研究の初年度は、研究対象となる作品のテクストをドイツ語圏の図書館や文書館などから入手し、それらを読解することを中心にした。同時に、当該作品のテクスト以外にも、研究に必要なアルノルトの他作品や論文、その他の資料も蒐集・調査した。

デジタルデータ化されていない著作で、それがもしマイクロフィッシュ化されているならば、ドイツの図書館から取り寄せねばならない。また、十八世紀の通俗小説研究でのテクスト蒐集においては、どの図書館にも収蔵されていない作品が古書として売られている場合もある。その時には、それを古書肆から購入する必要が生じた。

マイケル・ハドリーの論考や、アメリカの研究者ダニエル・ホールによる、ドイツとフランスのゴシック小説に関する研究書『十八世紀後半のフランスとドイツのゴシック小説』(2005)でも採り上げられている『墓の上での婚礼の接吻』は、ゲッティンゲン大学図書館に所蔵され、マイクロフィッシュ化されていることを確認したので、それを取り寄せようとしたが、残念ながら、これは、本研究期間中には達成できなかった。

アルノルト作品以外の、一次文献として必要な同ジャンルに属する他の作家によるテクストの入手方法も、アルノルト作品の場合

と同様の方法で行った。

次に、二次文献であるが、まず、作者と同時代の書評集である、フリードリヒ・ニコライ編集の『新・一般ドイツ文庫』(1793-1806)を参照した。これは、ビーレフェルト大学が、すべての巻のデータをデジタル化してウェブ上に公開しており、しかも題名でそれに該当する書評テクストを検索可能なので、それを利用することができた。

アルノルトひとりに特化した研究書は、いまのところ出ていない。ただ、エアフルトの研究者トーマス・カミンスキーによる文学史的な論文や解説が数本あり、その内のひとつは、1800 年前後の〈恐怖小説〉についての研究論文集 Populäre Erscheinungen. Der deutsche Schauerroman um 1800 (2011)（ここでの Erscheinung には「幽霊現象」と「出版」の二つの意味が重ねられているので原題のままにした）に収載されている。これは、英語圏（ダブリン大学）の研究者の呼びかけにより成立したアンソロジーであるが、ドイツのゴシック小説としての〈恐怖小説〉に対して、ドイツ本国でも学術的関心が出てきたことを示す興味深い論集である。他に、ハドリー以降のドイツのゴシック小説についての諸論文での、アルノルト作品についての言及もチェックした。

４．研究成果

(1) 平成 26 年度

先にテクストをゲッティンゲン大学から入手してあったアルノルトの小説『血の染みのある肖像画』Das Bildniß mit den Blutflecken (1800)は、研究の資料として用いるべく、また、アルノルトの日本への紹介の目的もあり、日本語への全訳に着手した。同じ 1800 年に出版の小説『分身のいるウルスラ会修道女』Die doppelte Ursulinernonne のテクストもハレ大学から入手し、ひと通り読み終えた。

1801 年のアルノルト作品『吸血鬼』Der Vampyr との関連において、〈恐怖小説〉の主要な題材のひとつである〈吸血鬼〉のドイツ文学における展開を調査していたが、その過程でアルノルトの『吸血鬼』のテクストは現存が確認できない状況であることが判明した（テクストが散逸したか、出版予告のみに終わったかのいずれかと推測される）。そこで、今回の研究でアルノルトの比較考察を計画していたドイツ・ロマン主義の作家Ｅ.Ｔ.Ａ.ホフマンの短篇で、このジャンルにおける重要作品である「ヴァンピリスムス」Vanpirismus（1821）をテクストに採り上げて考察することにした。その成果として、「阿魏(アサフェティダ)の匙加減―Ｅ・Ｔ・Ａ・ホフマンの吸血鬼譚「ヴァンピリスムス」（1821)」と題する論文を作成し、岩波書店の隔月発行の学術雑誌『文学』2014 年７/８月号）に寄稿した。ここでは、上記アルノルト作品にも言及しつつ、ミシェル・フーコーによる「踏み越え」といったポストモダン哲学の概念を援用して、そのテクストを詳細に読解した。

なお、2015 年１月には、中央大学国際センターを通じて、ゴシック小説および恐怖小説の研究者であり、当該ジャンルの専門出版企画 Udolpho Press を主催するノルベルト・ベッシュ博士 Dr.Norbert Besch から、研究内容についての問い合わせがあったので、自身の研究の現状について知らせると共に、今後も相互の研究について有益な情報の交換を継続することを約した。

(2) 平成 27 年度

2015年７月に二松学舎大学で開催された日本比較文学会東京支部例会では、アルノルトがフリードリヒ・シラーの有名な戯曲『群盗』（1781）を脚色し通俗小説化した『モール伯爵家』Die Grafen von Moor（1802）と同作者による犯罪実録小説『黒いヨーナス』Der schwarze Jonas（1805）を対象テクストとする研究発表を行った。そこでは、この二つの作品における特異な〈盗賊小説〉としての性格を、当時の刑事政策や十八世紀末ドイツにおけるサド侯爵作品の受容などとの関係で論じた。

同年 10 月には、昨年度より読み進めていた『血の染みのある肖像画』と『分身のいるウルスラ会修道女』についての論考「1800 年の幻想ミステリ」を中央大学人文科学研究所の紀要である「人文研紀要」第 82 号に発表した。

〈恐怖小説〉では、超自然的な謎が描かれても、しばしばそれらに対して最終的には合理的な解明が為される。英国のゴシック小説研究の用語を借りるなら〈解明される超自然〉explained supernatural と呼ばれるこのタイプの作例は、アルノルトにも多く見られる。上記二作品でも幾つもの超自然現象が出来するが、それらは結局、犯罪的な企みの人為的仕掛けによるものと説明されて終わる。ただ、どちらの作品もその最後の合理的解明部分に曖昧さがあり、理性的姿勢は不完全な印象を与える。ここには、理性の世紀であると同時に神秘主義が大流行した時代でもある十八世紀における合理と非合理の拮抗の反映が認められる。

拙論では、この観点から、アルノルト作品を通して十八世紀の啓蒙主義を多角的に分析した。また、アン・ラドクリフ作品を代表とする英国の同タイプのゴシック作品と比較することで、ゴシック小説の性質や技法における両国の違いも明らかにした。

同時に、〈解明される超自然〉タイプの小説の後裔とも言い得る〈探偵小説〉との構造比較も行うことで、これらアルノルト作品が、合理的解決と並行して超自然的解決の可能性を導入する現代の〈幻想的ミステリ〉に近似している点も指摘した。

(3) 平成 28 年度：

前年度の日本比較文学会での研究発表に基づき、『モール伯爵家』と『黒いヨーナス』を主要な対象テクストとして、アルノルトの盗賊小説について考察した論文「過激な盗賊たち」を、「人文研紀要」第 83 号（2016 年 9 月発行）に寄稿した。

十八世紀末のドイツ語圏では、 盗賊を主人公にした〈盗賊小説〉が数多く出版され人気を博していた。この流行に乗って書かれたアルノルトのこれら二作品は、語りのタイプこそ違え、どちらも、極端な思想を主張したり、あまりにも異常な犯罪を行う盗賊が登場する点において、同ジャンルに属する作品群の中でも際立って特徴的である。特に『黒いヨーナス』の残酷描写は常軌を逸している。拙論では、研究発表の時と同様に、盗賊小説が流行した社会的背景を調査し、また、その残酷描写については、サドの作品（同時代に唯一ドイツ語に訳された『恋の罪』（1799-1800）中の一篇「ロレンツァとアントーニオ」）と比較して、その文学的な質の違いについて論じた。

さらに、アルノルトの盗賊小説、とりわけ『黒いヨーナス』には、 読者の卑俗な嗜好の過激化がジャンル小説の文学的な質の低落を招くという問題が、マスメディア時代の初期である十八世紀末からすでに露骨に現れているのが認められる。この点から、通俗小説に対する当時の検閲の姿勢や、出版業界において十八世紀末の大衆作家が置かれていた状況についても調査・考察した。

最後に、この研究期間中、テクスト分析と平行して進めていたアルノルトの『血の染みのある肖像画』の翻訳はほぼ草稿が完成したので、続いて『分身のいるウルスラ会修道女』の和訳にも着手し、これは、約三分の一まで訳し終えたことを付け加えておきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

① 亀井 伸治、過激な盗賊たち―イグナーツ・フェルディナント・アルノルトの盗賊小説―、人文研紀要（中央大学人文科学研究所）、査読無、第 83 号、2016、279-312

② 亀井 伸治、1800 年の幻想ミステリ―イグナーツ・フェルディナント・アルノルトの二つの作品について―、人文研紀要（中央大学人文科学研究所）、査読無、第 82 号、2015、105-134

③ 亀井 伸治、阿魏(アサフェティダ)の匙加減―Ｅ・Ｔ・Ａ・ホフマンの吸血鬼譚「ヴァンピリスムス」(1821)、文学（岩波書店）、査読無、第 15 巻・第 4 号、2014、179-192

〔学会発表〕（計１件）

① 亀井 伸治、過激な盗賊たち―イグナーツ・フェルディナント・アルノルトの盗賊小説（ロイバーロマーン）―、日本比較文学会（東京支部 2015 年 7 月例会）、2015.7.18、二松学舎大学 3 号館 3021 教室（東京都千代田区）

６．研究組織

(1)研究代表者

亀井　伸治（KAMEI, NOBUHARU）
中央大学・経済学部・准教授
研究者番号：10329039